変わることの大切さと変わらぬことの大切さ

相　津　佳　永
（室蘭工業大学）

本年 4 月，日本光学会は満 60 年を迎えました．10 年前には 50 周年記念の特集号が発行され，光学会発展の貴重な歴史が詳細に残されています．その後の 10 年，光学会がさらなる進展を遂げてきたことはいうまでもありませんが，同時に教育研究環境や社会構造の著しい変化があったことも見逃せません．こうした歩みを 10 年の節目として書き留めるべく，60 周年記念の小特集が本号で組まれました．

学会は設立の初期に築かれた礎を基に常に発展を目指しますが，そこには変わることの大切さと変わらぬことの大切さが共存しているように思えます．この 3 月まで「光学」編集委員長として関わった案件の中で，「光学界の進展」特集の見直しについて，思いの一端を述べてみたいと思います．本誌「光学」の 4 月号には，前年の光学における研究の進展を分野ごとに概説する「光学界の進展」特集が毎年掲載されてきました．この特集には 46 年あまりの歴史があります．本企画は光学界の動向把握に加え，光学会が担う分野の明示，教材・資料としての価値，人材発掘・育成などの効果がある一方で，最近では執筆者確保の難しさ，分野間の執筆量・質の不均衡，読者離れなどの問題が顕在化し，数年来，編集委員会の課題となっていました．

昨年と本年の 4 月号は，光学会の各研究グループのご尽力により，当該分野の動向を俯瞰していただく試行を行いました．その一方で編集委員会では，伝統ある本企画の今後のあり方について議論を重ねてきました．企画が始まった当初とは学会を取り巻く状況が著しく変わった現在，時代に即した本企画の趣旨をあらためて明確にすることが課題でした．

議論の末に見えてきたことは，光学会こそが日本における光科学・技術分野を最も幅広く適切にカバーできる学会であり，発展のみならず，その変遷を把握し，伝え，記録に残す役割を会誌「光学」は担っているということです．そして，その役割を果たす手段として，研究動向の解説を編集委員会における最も重要な企画のひとつと位置づけ，積極的に推進するという方針です．

もとより発展の本質は変革です．それには“先人から学ぶ”ことも大切です．「光学」は毎月の特集企画で新分野を含むさまざまなトレンドを伝えています．発展著しい時代であればこそ，年に一度，従来から準拠してきた 18 ほどの分野を変わらぬ座標軸として，定点観測のごとく流行り廃りを含めた光学の動向をマッピングし，過去からの変化・発展・融合の動きとその向かう先をしっかり捉えること，その経年記録を日本語のアーカイブとして蓄積することは，他誌に類をみない光学会の貴重な財産になるものと思います．

新たな魂がこめられた「日本光学会の研究動向」が，これから日本光学会の積極的な役割を果たしていくことを期待したいと思います．